

人間の学習についての行動主義的説明にも現れている。すなわち、心理学者が、理論的先人観に左右されることなく——少なくとも、そう信じて——、人間行動の性質を「観察」し、「発見」しようとする（つまり、知ろうとする）とき、その心理学者は、すでに、「知る事」についての理論を「導き出して」しまっているものであり、心理学者の研究活動は、その「知る事」についての理論によって正当化されているのである。

次のように考えてみよう。まず、行動主義の理論には、強固な環境決定論的バイアスがある。すなわち、行動主義の観点からすれば、人間の行動とは、環境からの入力によって導かれ、統制され、刺激を受けた、一連の「反応」である。かくして、行動主義理論のレベルにおける「刺激入力」は、論理実証主義的メタ理論のレベルにおける「外界の性質」に相当する概念にほかならない。すなわち、人間行動の主要な決定因としての刺激入力は、メタ理論における外界の性質——理論構築を促す刺激としての性質——と、事実上、同じ機能をもつ（図1・3を参照）。

次に、観察と論理のプロセス（フェーズⅡ）に関しては、行動主義における二つの主要なパラダイム——急進的行動主義と新行動主義——を区別しなくてはならない。ワトソンやスキナーのような急進的行動主義者は、徹底的に「科学的」たらんとし、観察可能なもののみを研究対象とし、心的状態のような仮説的領域についての陳述を回避した。したがって、急進的行動主義にあつては、仮説演繹プロセスの第二段階が何を意味するのかは、一見、明らかではない。心的過程において「観察」や「論理」に対応するものを明らかにするのは困難だからだ。しかしながら、第二段階は、有機体の内的動作に関する記述ではなく、行動として示される結果の記述に現れる。すなわち、合理的思考が生じる内的過程については何も言えないが、人間は適応性を最大化するように行動する——すなわち、合理的に行動する——というわけだ。ワトソン (Watson, 1924) が言うように、「人間は、他のどの哺乳類よりも未熟な状態で誕生するが、後天的に獲得する習慣ゆえに、非常にすばやく学習し、他の動物たちを凌駕する」(p.234)。さらに、スキナー (Skinner, 1971) は、次のように述べる。「オペラント条件づけの過程は、……自然淘汰を補うものである。重要な結果をもたらす行動であっても、環境の中で十分に安定したものでなければ、進化に貢献することはできないが、それは、個人の人生において、オペラント条件づけを通じて有効なものとなりうる。このようにして、その個人が世界を扱う能力が大幅に増大する」(p.46)。実際、急進的行動主義者は、いかなる心的過程も特定しないけれども、人間行

動を、合理的で問題解決的なものとして記述する。かくして、仮説演繹法の第二段階は、暗黙のうちに理論に組み込まれているのである。

論理実証主義的メタ理論の制約が緩和されることにより (Koch, 1966)、急進的行動主義は、徐々に、新行動主義の理論 (S—O—R 理論) に道を譲っていった。なぜならば、初期の論理実証主義の教義、すなわち、理論言語と現実世界の観察との正確な対応を最重視する教義には、あまりにも制約が大きいがわかったからだ。そもそも成熟した科学にとっては、観察可能な現象を直接には指示しない理論言語こそが重要である。例えば、「重力」「力の場」「磁力」などの用語は、どれも自然科学の領域では非常に有用であるが、直接観察可能な指示対象をもたない。メタ理論のレベルにおけるこの制約緩和によって、心理学は、「仮説的構成体」(MacCorquodale and Meehl, 1948) の概念を手に入れることができた。仮説的構成体とは、刺激と反応を媒介する仮説的な心的状態を指す概念である。こうして「心」について語る道が開かれ、行動主義者は、論理実証主義のメタ理論の中心である観察と論理のプロセスに機能的に対応する用語を用いることができるようになった。例えば、クラーク・ハル (Hull, 1943) は、「習慣強度」「誘因強度」「抑制ポテンシャル」などの用語を、所与の状況に対して適切な反応を生起させるメカニズムを説明するために使用した。また、期待—価値理論 (Rotter, 1966; Aizen and Fishbein, 1980) では、理論レベルにおける「期待」は、メタ理論レベルにおける「仮説」と同等のものとして使用された。さらに、社会的学習理論のアルバート・バンデューラ (Bandura, 1977) は、同じく「期待」という概念を使用するとともに、「暗黙の問題解決」「思考による検証」などの過程を、心理学の概念レパートリーに付け加えた。

論理実証主義的メタ理論においては、知識獲得の第三ステップは仮説検証であるが (図1・3)、学習理論は、その代わりに強化の概念を用いる。スキナー (Skinner, 1971)、ソーンタイク (Thorndike, 1933)、バンデューラ (Bandura, 1977) のような学習理論家によれば、強化とは、ある反応パターンを選択・維持し、その他の反応パターンを「消去する」ことである。その際、選択・維持される反応パターンは「適応的」と言われ、消去される反応パターンは「非適応的」と言われる。この意味において、仮説検証は、強化と同じ機能を果たしている——複数の行為の中から、適切なものを指定する、という意味において。このように見えてくると、仮説演繹法の第四ステップ、すなわち、

理論の拡張と修正の段階が、スキナー派の言う「行動形成」過程の後の段階、あるいは、より認知主義的な学習理論の言う「期待確認」過程の一段階に対応していることがわかる。いずれの場合においても、個人の心的機能が、徐々に環境に適応していくものとみなされている。このように、仮説演繹システム全体が、行動主義の様々な学習理論の中に現れている。

以上の議論の結論として、クラーク・ハルの「行動の原理」からの引用に優るものはないだろう。ハルは、科学の本質にまずふれ、仮説演繹法について詳しく述べている（文章の前の番号は、図1・3の各段階を示す）。

- I 科学の原理や公準は、鋭い推測を伴う経験的観察によってもたらされる。その原理や公準に立脚し、先行する諸事象との結びつきの可能性をも考えることによって
- II 推論や定理が得られる。それらの中には、当該状況における経験的結果と一致するものもあれば、一致しないものもあるだろう。観察された結果と一致する論理的演繹を与える命題群は
- III 維持され、一致しないものは棄却されるか修正される。この試行錯誤の過程が進むにつれて、少数の主要な原理が次第に絞られてくる。それらの
- IV 原理の内容は、次第に、観察と一致するようになる。こうして生き残った命題群からの演繹は、百パーセント 確実とまでは言えないにせよ、非常に信頼のおけるものとなる (Hull, 1943, p.382)。

科学についてのハルの見解と、ハル自身の学習理論との間には、顕著な類似性がある。ハルは、自分自身の学習理論を、次のように要約している（ここでも、文章の前の番号は、仮説演繹モデルの各段階を示す）。

多くの実験によって示されているように、基本的な学習過程の内容は、次のようなものである。すなわち、ある欲求の条件が存在し、…(略)…この条件は、

- I 環境からの刺激エネルギーによって触発される。このことは、…(略)

Ⅱ 適応的であるかもしれない多くの反応ポテンシャルを活性化する——そのポテンシャルは、有機体の進化によって規定される。こうしたランダムな（一連の）反応が、その時点で支配的な欲求の低減をもたらすならば、間接的な効果、すなわち、

Ⅲ 強化として知られる効果が生じる。すなわち、（１）もともと反応を媒介していた、特定の受容器—効果器の結合が強められ、（２）すべての受容器が解放される傾向が見られ、ほぼ同時に、問題の反応を媒介する効果器との間に、新たな結びつきが形成される。（１）は、基本的な試行錯誤型学習として知られているものであり、（２）は、条件反射型学習として知られているものである。結果として、同じ欲求が、同一の、ないし、類似の状況で再び生じたとき、刺激は同じ効果器を、最初のときよりも、より確かに、より速やかに、より強力に活性化する。こうした活動は、

Ⅳ 適応的には絶対確実なものではないが、長い目で見れば、学習に基づかない偶然的反応を積み重ねるよりも、確実に、欲求を低減させるだろう。かくして、こうした受容器—効果器結合の獲得は、概して、生存に役立つ——すなわち、適応的となる（Hull, 1943, pp.386-387）。

このように、科学と人間の学習過程には、類似性がある。すなわち、行動主義の学習理論は、科学のメタ理論を模写しているのである。

二十世紀前半の数十年間、メタ理論と理論は、ともに、主流の方法論ともシンクロナイズしていた。言うまでもなく、観察的手法、とりわけ、統制された実験は、それ自体、経験主義哲学によって支持されていた。心理学は、現実世界の性質——論理実証主義にとつての「物質的先行事象」、行動主義理論にとつての「刺激世界」——を、「独立変数」という概念で、方法的言説の中に取り入れた。実際、実験条件は、有機体とは独立に存在し、実験条件における有機体の行動に論理的に先行するものとされた。すなわち、独立変数の操作は、有機体の行動を方向づけ拘束する因果の力から独立しているとされた。他方、有機体の「結果としての行動」は、「従属変数」——独立変数の操作によって引き起こされ、それゆえ、独立変数に従属する——の概念によって捉えられた。すなわち、方法的言説における従

属変数は、論理実証主義的メタ理論における「物質的結果事象」、行動主義理論における「行動反応」にほかならない。実際、実験で何が生じたかの説明は、実験状況を記述する用語の選択と相俟って、当時のメタ理論的、理論的観点と十分に共鳴し合うものであった。すなわち、論理実証主義のメタ理論は、機械的に関係する実体からなる秩序ある世界を想定し、実験的方法論は、因果関係を正確に特定することを保証し、結果として得られる人間行動の理論は、人間の行動がその先行条件に依存することを示していた。かくして、行動主義の時代には、メタ理論、理論、方法論は、緊密に結びついていたのである。

(2) 批判フェーズ・中核的命題群の衰退

行動主義の時代——相互支持的な言説群の時代——に広く浸透していた楽観論や使命感は、今日ではほとんど残っていない。論理実証主義のメタ理論、行動主義の理論、実験的方法論の言説が、その後、厳しい批判にさらされたからだ。すなわち、これら三種類の言説すべてが、理論の転換過程における批判フェーズに突入したのだ。まず、メタ理論のレベルでは、論理実証主義は、常に、哲学の領域内部でも、他の領域に翻訳される中で、高く評価されていた。哲学において、長期にわたって論争の焦点だったのは、科学における個人的経験の位置づけの問題、物質的事象と経験との関係をめぐめる問題、観察対象と言語との結びつきの可能性をめぐめる問題などであった。しかしながら、二十世紀半ばから、科学哲学において、論理実証主義は、痛烈な批判を浴びせられるようになった。経験主義の前提すべてに対して、容赦のない批判が加えられた——伝統的な分析的言明／総合的言明の分離に対する批判 (Quine, 1953)、理論構築法としての帰納法に対する批判 (Hanson, 1958; Popper, 1959)、証明の論理についての批判 (Popper, 1959)、操作的定義の可能性についての批判 (Koch, 1963)、言葉と対象との関係についての批判 (Quine, 1960)、理論的理解と予測の相互依存性についての批判 (Toulmin, 1961)、競合する理論の共約可能性についての批判 (Kuhn, 1962)、事実と価値の分離に対する批判 (Machlup, 1973)、理論負荷のない事実の可能性についての批判 (Hanson, 1958; Quine, 1960)、科学的手続きの基本的合理性に対する批判 (Barrett, 1979; Feysabend, 1976)、理論の反証可能性についての批判 (Quine, 1953)、科学的知識の中立性に対する批判 (Habermas, 1971)、法則モデルの人間行動への適用可

能性についての批判 (White, 1978) などである。今や多くの哲学者が述べているように、科学的知識の哲学は、ポスト経験主義の段階に入っている (Thomas, 1979)。すなわち、いくつもの取るに足らない例外を除けば、科学を根本的に合理的なものともみなそうとする試みは、概ね消滅している。

理論のレベルでは、心理学において、行動主義に対する全面的な攻撃が展開された。初期の批判の多くは、シグムント・コッホ (Koch, 1963) を中心とするものであった。それらの批判には、媒介変数 (すなわち、 $S-O-R$ 理論) による説明に対する批判、仮説的構成概念と観察対象との結びつきについての批判、実験の理論検証能力を過信することに対するについての批判、行動法則の一般性についての批判、などが含まれる。その後、学習法則の種間一般性という行動主義者の仮定に対する批判、行動原理を歴史依存性とする批判、行動主義理論のイデオロギー性についての批判などが、次々と提起された。

中でもとりわけ劇的な影響力をもったのは、生得主義に基づく批判である——それは、人間行動が、刺激入力からだけでは決して説明できないと主張する限りにおいては、一九三〇年代のゲシュタルト心理学による批判と共通していた。例えば、チョムスキー (Chomsky, 1968) が見事に示したように、言語使用の能力は、原理的に、環境からの強化によっては導かれえない。また、ピアジェ (Piaget, 1952) らによれば、抽象的思考能力は、学習によって獲得されるものではなく、子供の自然な発達によるものである。より一般的に言えば、有機体は、固有の生得傾向——情報を探索し処理する傾向、仮説を立てる傾向、目標に向かう傾向など——を備えていることが主張された。こうした議論の出現により、一方向的な因果関係——刺激→反応という因果関係——の連鎖という考え方も崩壊した。そして、多くの点で、有機体はそれ自身の自律的な行動原因をもっていると主張された。

経験主義のメタ理論、および、行動主義理論が衰退するのに伴って、実験的方法論への批判も広がった。初期の批判では、実験結果が、実験者によるバイアスや、実験者の要求特性の影響を受けていることが強調された (Rosnow, 1981の要約を参照)。それとともに、実験操作の倫理上の問題 (Smith, 1969; Kelman, 1968)、被験者に対する実験者の操作的態度の問題 (Ring, 1967)、実験の生態学的妥当性の問題、実験結果が熟練した演出の産物だとする批判 (McGuire, 1973) などが提起された。さらに、批判心理学やフェミニズムなどは、イデオロギー批判の観点から、実

験が、資本主義社会や男性中心社会に固有の支配と統制のシステムを複製していると論じた (Hampton-Turner, 1970; Reinhartz, 1985)。現在、心理学の中心的な研究者コミュニティでは、実験に代わる新たな研究方法が模索されている——それには、フィールド研究、質的研究、事例研究法、対話的研究法、などが含まれる。

(3) 転換フェーズ・コンセンサスなき認知主義の時代

見てきたように、行動主義の全盛時代に形成された、メタ理論と理論と方法論の緊密な協力関係は、綻び始めている。論理実証主義のメタ理論、行動主義の理論、実験の方法論は、すべて、多くの批判にさらされている。今や、理論的転換のための批判フェーズは、十分に熟した観がある。しかし、はたして心理学は転換フェーズに突入し、新たな中核的命題群が作り出されたであろうか？ 心理学の現状はいかなるものであり、将来はどうなるのであろうか？ こうした問題を考えていくには、意味の四角形 (図1・1) に立ち戻るのが有効だろう。以下、述べてきたような批判をふまえた上で、新たな中核的命題群を位置づけ、理論的転換の可能性を模索しよう。

まず、メタ理論のレベルでの転換可能性を考えてみよう。経験主義の衰退によって、批判勢力の知的世界から新たな科学哲学が生まれるとしたら、それはいかなるものであろうか？ 私の考えでは、反経験主義の主な主張は、三つのカテゴリーに分類できる。第一は、パラダイム内の批判、すなわち、経験主義的メタ理論の前提のいくつかを修正するが、科学が根本的に合理的であるという前提は堅持しようとする立場である。こうした立場の代表が、ポパー (Popper, 1963) の議論である。ポパーは、伝統的な経験主義の帰納主義的前提を痛烈に批判したが、それを「批判的合理主義」で置き換えることによって科学の合理性を堅持しようとした。ラカトシュ (Lakatos, 1970)、『ローダン (Laudan, 1977)』、バスカール (Bhaskar, 1976) の議論も、いくつかの点で議論の余地はあるが、このカテゴリーに位置づけることができよう。すなわち、彼らは、経験主義の前提のいくつかを否定する一方で、主客二分法のようなキー概念を保持し、同時に、超越論的合理性を探求し続けている。実際のところ、こうしたパラダイム内の批判では、私の考える急進的な理論的転換に至ることはないだろう。

第二の批判は、批判フェーズに織り込まれた「経験主義—合理主義」の二分法に基づく批判、すなわち、経験主義

に伝統的に対立する観点——合理主義——から導出される批判である。周知のように、西洋における「知ることに」についての諸理論の歴史は、人間の知識が経験的な人力によって作られるとする説明と、精神こそが知識の源泉であるとする説明との間を、振り子のように往復してきた。経験主義の伝統をくむ哲学者——ロック、ヒューム、ミル——によれば、個人の知識は、大部分、環境の経験から形成されるものである。すなわち、個人が知識を得るのは、観察を通じてであって、現実世界との経験的接触なしには、知っていると言へることはほとんどない、とされる。他方、合理主義の伝統をくむ哲学者——スピノザ、デカルト、カント——によれば、人間の心に固有の性質こそが、知識の発達にとって必須とされる。すなわち、生来の理性——世界を編制する能力——がなければ、知識を所有していると信じていることなどできない、とされる。これらの議論を受けて、論理実証主義の科学哲学は、伝統的な経験主義を改良し、二十世紀の科学哲学を作り上げた。したがって、述べてきたような経験主義——合理主義の二分法をふまえるならば、合理主義陣営からの批判が期待できるだろう。例えば、ハンソン (Hanson, 1958) やクーン (Kuhn, 1962) の議論は、ある意味で、合理主義の伝統に基づいたものである。すなわち、ハンソンによれば、心の概念は、外的事実の同定に先行しなくてはならない。また、クーンによれば、パラダイムシフトは、ゲシュタルト・シフトと似ている——それは、データによってではなく、固有の心的傾向によって生じる。

合理主義に基づく批判の言説は、科学的知識についての新たな理論に結実するだろうか？ 面白いことに、合理主義の前提を徹底的に拡張して、新たな知識の理論を作り出そうとした哲学者はいない。私の考えでは、この可能性は、過去三世紀にわたる哲学的論争の結果、実質的に不可能になっている。中でも、唯我論の問題、生得的知識の問題、物心二元論、政治的保守主義の問題（第5章を参照）によって、こうした探求は挫折してきた。実際、経験主義が、合理主義的な基礎づけ主義によって覆されることは、ありそうにない。

メタ理論のレベルにおける第三の批判は、上述の二つの批判とは全く次元を異にする立場からの批判、すなわち、論理実証主義とも合理主義とも異なり、両者をまとめて一極に置いたときに、その対極となるような立場からの批判である。この批判は、最も効果的でないが、同時に、最も効果的でもある。すなわち、この批判は、支配的な中核的命題群の関心に合致するようなやり方でアピールしなければ、効果が無い——実際、しばしば、何を言っているのか

わからない、本筋から脱線している、対話に乗らない、などとみなされるという点で、最も非効果的である。しかし、同時に、この批判は、次の場合、最も効果的でもある——(1) 批判対象が、自分を擁護する手段をほとんどもたない場合、(2) 批判が、既存の観点に対して、有意義な観点を新たに与える場合、である。例えば、経験主義にとって、合理主義からの批判は、事実上、儀式的なものである——議論と反論の応酬は何世紀にも渡って繰り返され、にもかかわらず、「新たな議論の展開」はほとんど生じなかった。批判的言説(すなわち、合理主義)の中核的命題群は、よく理解されているし、その欠点も明らかになっている。しかしながら、この二項対立の外部からの批判の場合、こうしたことは当てはまらない。なぜならば、批判に対する反論が十分に準備されてこなかったからであり、新たな中核的命題群からの批判が、既存の中核的命題群の理解を超えているからである。

全く次元を異にする立場からの批判として、二つの批判——イデオロギー批判と社会的批判——に注目してみよう。イデオロギー批判は、経験主義に内在する道徳的・政治的バイアスに注目する。例えば、マッキンタイア (MacIntyre, 1981) とハーバーマス (Habermas, 1971) は、「知ること」についての経験主義的概念が、人類の幸福にとって有害であると指摘している。実際、経験主義的概念は、道徳的・政治的基準で吟味することができない——経験主義が、道徳的・政治的バイアスから免れていることを示す手立てがない。事実、経験主義者は、道徳的・政治的善をめぐる対話に参加することを、周到に避けてきた。同様のことが、社会的批判についても言える。社会的批判とは、科学の中核的命題群を生み出す様々な社会的過程に注目する立場である。例えば、クーン (Kuhn, 1962) は、パラダイムへのコミットメントの共同体的基盤を強調し、科学的知識が社会に根拠をもつことを論じている。同様に、ファイヤアーベント (Feyerabend, 1976) も、合理性が、文化的伝統の一形態であることを明らかにしている。ここでも、こうした批判に対して、経験主義者は、十分反論することができなかった。実際、経験主義陣営からなされた反論は、面白くない、建設的でない、ズレているなどといった、およそ的外れな反論ばかりであり、そのことがかえって、社会的過程に基づく理論が「知ること」についてのもう一つの理論として浮上する土壌を作ってしまった。次章で、われわれは、イデオロギー批判を他の知的批判とともに社会的批判に統合し、「知ること」についての新たな理論——社会構成主義——を提示することになる。重要なことは、経験主義と合理主義のどちらも、新たに構成される二項対立の極と

はならないことだ。経験主義も合理主義も、「頭の中の知識」という觀念を自明視している。それに対して、新たな立場（社会構成主義）は、知識が共同的關係の産物であることを主張する。

哲学者が経験主義に代わる有力な基礎理論を打ち立てることができないのと対照的に、心理学は、急速に理論的転換を果たした。大まかに言えば、その理由は、行動主義に対する批判が、伝統的な「経験主義—合理主義」の二項対立を前提とし、もっぱら、合理主義に依拠してなされたからである。批判者は次のように言う——行動主義の理論は、人間に固有の理性を考慮することもできないし、思考過程の領域を考察することもできないし、意識や意図の問題を扱うこともできない。これらの批判はすべて、合理主義の枠内からの議論である。

さて、われわれにとって最も重要なのは、心理学においては、こうした批判の前提が明らかにされたために、批判が、新たな存在論へと転換したことである。例えば、チョムスキー（Chomsky, 1968）は、言語獲得（を含む、人間の行為一般）は、環境からの強化によって理解することはできないと論じ、行動主義批判に重要な貢献を果たした。チョムスキーが、子供が上手に文章を構成する際に見せる抜群の柔軟性を、生得的傾向——文法的知識の「深層構造」から説明していたまさにそのとき、合理主義の存在論も形成されつつあったのだ。その後、この合理主義の存在論は、現在で言う「認知革命」に結実した。認知主義は、例えば、スキーマ、情報処理、環境走査、スキーマ駆動型記憶など、個人の「心」に内在するメカニズムを研究の俎上に乗せ、合理主義哲学の現代バージョンとなった。このように、心理学理論の転換は、事実上、完了している——行動主義から合理主義へと。

最後に、方法論のレベルについて見ていこう。方法論は、論理実証主義のメタ理論と同じような軌跡をたどっている。すなわち、実験的手法に対する確信が弱まった一方で、批判は、広く信頼を得ることのできる代案を提出できていない。転換が失敗してきた主な理由は、実験に対する批判の多くが「パラタイム内」の批判だったことである。すなわち、実験に対する攻撃——外的妥当性の欠如の問題、実験者効果や要求特性の問題、倫理的不適切性の問題——は、どれも、実験そのものの原理的困難性を指摘するものではない——実験による知識生成の可能性については疑いもたれていない。こうして、実験に対する批判は、実験を無意味であるとして放棄するのではなく、実験の効率性を改善する方向へと向けられた——例えば、現場実験、二重盲検法、研究倫理委員会の設置などは、こうした試みの例で

ある。

さらに、方法論を転換させようとするこうした試みは、ある共通の問題に直面する。すなわち、理論を保証する装置としての方法論概念そのものが、「方法による真実の発見」を強調する経験主義の伝統と、分かち難く結びついているのである。それゆえ、フェミニズム、現象学、解釈学などにおいて、経験主義の方法に変わる新たな方法を模索している者は、その新たな方法が経験主義の厳密な基準——妥当性、信頼性、中立性、など——に適合していることをなんとかして示そうとしている。なぜならば、こうした（経験主義の）基準を満たさない限り、科学者集団に、自分たちがまさに科学的研究をしていることを認めさせることができないからだ。例えば、対話的方法論——被験者と科学者との対話から、新たな洞察を得ようとする方法論——は、「科学的」方法の道具としては信頼されていない。そして、もちろん、（新たな方法論が）経験主義的方法と同等であると示そうとすれば、既して、経験主義的方法の批判という目標は達成できなくなる。例えば、質的調査が、質問紙調査や観察法と同じくらい厳密であることを示そうとすれば、経験主義的な科学の概念を暗黙のうちに認めてしまうことになる。

他方では、「合理主義的方法論」とでも言うべき方法論も生まれていない。すなわち、個人が生まれつき合理的で、情報を求め、概念を記憶するという観点を、科学的実践のレベルにまで拡張したときに、いかなる方法論が帰結するのかを、誰も探求してこなかった。行動主義の時代には、心理学は、個人を、一人の科学者とみなしていた——市井の人々は、専門的な科学者と比べて、単に系統的でなかったり、厳密でなかったりするだけであった。そこでは、科学と人間の心理は、一つの貫いた全体を形成していた。しかし、認知主義の全盛時代には、そのような一貫性を生み出そうとする試みはなされなかった——人間行動についての支配的な見解を真剣に考慮して、科学的知識の本質が探求されることはなかった。その結果、現在、実証的方法論——これは、論理実証主義的メタ理論と行動主義の理論に親和的である——と、認知主義の理論との間に、奇妙な乖離が生じてしまっている。

この方法論と理論の乖離は、一貫性がないと皮肉を言つて済まされるものではない。認知主義による人間行動の概念化は、まさに、実証的方法の正当性を破壊する。すなわち、認知過程は遺伝的に決定されており、「トップダウン」で作動する——個人は、生得的構造を基盤として、情報の選択・分類を行う——という認知主義の主張は、個人が外

界についての正確な知識をもつことができないことを意味する。なぜならば、この場合、個人が世界についてもつ表象は、経験——「外界」に存在するもの——によってではなく、認知システムそのものの要求によって規定されると考えられているからだ。人間行動についてのこの観点を、科学的実践のレベルに当てはめて考えると、科学者が「自然についての権威」という信頼を失ってしまうことがわかる。すなわち、実験的手法は、「認知的バイアスを矯正すること」はできないことになる。なぜならば、実験者といえども、不可避的に、認知システムに要請されるやり方で研究を遂行するしかないからだ——例えば、既定のスキーマに従って実験を行い、その人の情報処理傾向に正確に従ってすべてのデータを解釈するしかない。さらに、実験者は、実験的操作と統制について正当化することができなくなる。なぜならば、認知理論の観点からすれば、被験者は、実験条件の何に注目し何を無視すべきかを決定する認知過程を、実験にもち込むからだ。他方、実験者の側は、被験者の行動を、自分がそもそももっているスキーマと合致するように解釈する。かくして、「独立変数」「従属変数」という論理の全体が無意味化してしまう。要するに、認知心理学は、自分たちの理論が、理論の経験的吟味の可能性を否定してしまうという、やっかいな状況にあるのだ。逆に言えば、実証的方法に依拠することは、論理的には、認知革命を基礎づけている人間観そのものの否定を意味するのである。

第5節 「頭の中の知識」という観念は衰退するか？

本章では、「頭の中の知識」という、長い間自明とされてきた観念に疑問を唱えてきた。この観念は維持できるのだろうか？ 世界状況の変化を考えると、確固とした観念のままであり続けるのだろうか？ われわれは、科学としての心理学の状況を明らかにすることによって、この疑問に答えようとしてきた。なぜならば、心理学は、「知る事」について、最も系統的に知識を生み出してきた学問領域だからだ。見てきたように、知識をめぐる心理学の主流は、この一世紀の間に大きく変化した。すなわち、心理学の理論は、行動主義から認知主義へと大きく転換した。しかし、図1・4に示すように、この転換は莫大なコストを伴うものであった。

行動主義は、その主張と完全に調和した言説的文脈の中から登場した。すなわち、行動主義は、支配的な科学哲学によって強く支持されたし、方法についての適切な言説にも恵まれていた。その後、論理実証主義のメタ理論も実証的方法論も衰退したが、「頭の中の知識」という観念を支持する有力な後継理論は、未だ現れていない。そのため、今日の認知理論の立場は、不安定である。というのも、認知理論の知識観は、それを支持する科学哲学（メタ理論）をもたず、また、その基本的前提と相反する方法論に依拠しているからだ。実際、認知心理学は、理論を支持する二つの主要な言説形式を奪われている——認知理論の合理性を正当化してくれる科学哲学、および、理論が真実であることを適切に保証してくれる方法論の二つの言説を。

こうしてみると、認知主義は、ほどなく十九世紀の心理主義と同じような運命をたどると思われる。もちろん、それを支えるメタ理論的・方法論的基盤がなくても、認知主義が自己維持的に存続することはありうる。私の考えでは、現在の認知主義の隆盛は、コンピュータとの連携によるものである——コンピュータは、認知理論のメタファーであり、技術的な検証を支えてもいる。実際、認知過程をコンピュータの機能と同視したり、コンピュータを人間の意思決定過程のモデルとして用いたり、コンピュータ・モデルの成功は人間の精神がまさにそのような機能していることを示すと結論したりすることによって、認知心理学は、自らの研究活動をうまく正当化してきた——たとえ、それが悪循環であるにせよ。こうして、様々な領域が自給自足で存続しているのが、現在の心理学のアカデミックな風景なのである。それぞれの領域でコミュニケーションすることもなく、もっぱら、自己の世界観にしがみついている。

しかしながら、認知主義が心理学における確固とした主導的立場になれるかといえは、その可能性はきわめて低いだろう。本章で分析したように、認知主義の主張を明確にすれば、その否定の条件が構成されてしまうからだ。そして、その否定が次第に明瞭になるにつれて、否定に抵抗する力は失われていくだろう——確固とした事実が措定不能なこと、認知主義を基礎づける哲学がないこと、前世紀の哲学論争をふまえれば、堅持できる前提もほとんどないことが明らかになるだろう。現在でさえ、コンピュータ・メタファーは、多くの批判にさらされている。第5章で述べるように、今や、自己批判的文獻が山積し、認知主義のパラダイムは、内部崩壊しようとしている。

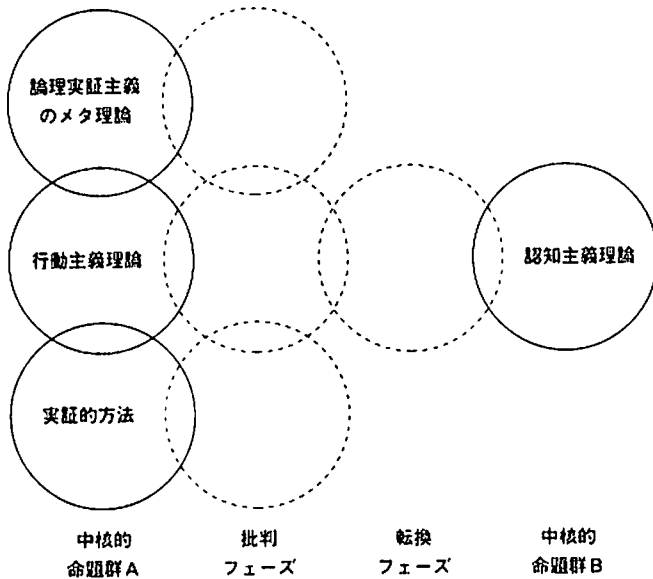


図1.4 孤立無線の認知主義理論

では、新たな批判フェーズに突入し、何らかの形態の行動主義への回帰が生じるのであろうか？ 心理学のこれまでの歴史——十九世紀の心理主義、二十世紀の行動主義から認知主義へ——を考えてみれば、このような回帰はありうることである。あるいは、経験主義と合理主義との間に生じた哲学論争——何世紀にもわたって繰り返され、何の解決も見なかった論争——を思い出してみても、行動主義への回帰はありえない話ではない。では、なぜ、理論がこれ以外の方向——行動主義——認知主義、経験主義——合理主義以外の振り子——に振れることがないのだろうか？ 思うに、そのような新たな方向性は、タブー視されているのだ。新たな方向に踏み出すには、まずもって、行動主義がすでにさらされてきた批判——バラタイム内の批判、合理主義の立場からの批判、イデオロギー批判と社会的批判——を乗り越える道を示すことが必要だろう。また、本章の分析が示唆しているように、人間行動の新しい観点を支える科学哲学が存在しないのも問題である。さらに、昨今の知的潮流の変化、すなわち、「頭の中の知識」から知識の共同的構成へとという変化のきざしを、推し進めていく必要もある。今やわれわれは、

啓蒙思想の遺産と「経験主義—合理主義」の二項対立を乗り越えなければならない。次章からは、この問題を探究していくことにしよう。

注

[1] 科学としての心理学と論理実証主義の結びつきの展開については、Koch (1963)、Toulmin and Leary (1985) を参照。

[2] もちろん、いかなる場合であれ、中核的命題群の相互支持の程度を決定するプロセスには、他にも多くのものがある。例えば、支持は、共有された前提に基づくだけでなく、派生物の類似性に基づくかもしれない。すなわち、もし類似の結果（インプリケーション）が、全く独立している（ないし、対立させている）二つのシステムによって好まれるならば、その二つのシステムは、相互支持的に作用するだろう。

[3] 超心理学 (parapsychology) は、おそらく、心理学から排除された最も典型的なケースだろう。宗教心理学、実存心理学、人文主義的心理学、現象学的心理学も、ほとんど受け入れられなかった。さらに、臨床心理学も、支配的なメタ理論と方法論から切り離されたため、「正しい心理学」の目であることが疑われるようになってきている。

[4] こうした言説的交換の基準を明示する試みとしては、van Eemeren and Grootendorst (1983) を参照。

[5] 言説の様相が、すべて、潜在的には論争的かどうかは——例えば、マレーシアの歴史の評価が、星の運動の理論に疑問を付したように——、興味深い問題である。その際、論争が意義あるものであるためには、相互に共通する前提が必要である。例えば、経験主義と合理主義が何世紀にもわたって論争を続けてきたのは、基本的に、両者が「頭の中の知識」という観念を共有し、それが文化的に重要な意味をもったからである。存在論や価値観をめぐって、このように実質的な合意がなければ、論争はほとんど不可能だろう。つまり、一般的に言って、差異は、共通性の維持に依拠して存立する——否定は、肯定に基づく否定なのである。

[6] ターンの説明において同時に問題なのは、理解における「メタシタルト・シフト」というメタファーである。このメタファーは、単一の図が両立不可能な二通りの見方をする——図と地が相互に反転する——という、錯視の研究に基づいている。しかし、理論は、本質的に、言語による産物である。そうすると、このメタファーは難問に突き当たることになる。すなわち、いかにして知覚レベルのシフトが言語に影響するのか（逆も同様）？ 知覚の変化は、必然的に、世界についての説明を変化させるの

か？ 音声と記号（つまり、「言語」）の変化は、われわれの知覚を変化させるのか？ 実際、これらの問いに答えることは難しい。Kuhn (1977) は、その後、説明を改訂しているが、その説明も同様に認め難い。すなわち、クーンは、その後の改訂において、経験主義的な基礎づけ主義に代えて、いわゆる「エビステモーの価値詐」にパラダイムシフトの根拠を求めている。クーンによれば、予測の正確さ、説明の包括性、内の一貫性などの伝統的基準は、理論を評価する際の基準になるかもしれないが、それは、そうした基準が人々にとって価値をもつ限りでのことである。このように価値の問題を考慮に入れて点で、クーンは、科学の合理主義の一手手前で踏みとどまっている。しかしながら、個人主義に基づいている点（価値を選択するのは個人とされている）、記述の正確さの判断基準を想定している点で、批判を免れないだろう。

[7] 当時における、理論的言説、メタ理論的言説、方法的言説の相互支持の影響を理解するには、実験手続きをめぐる、一般的な見解を、他のありうる見解と対照させてみるのがよい。例えば、ある形而上学的立場にコミットしているからこそ、「独立変数」が「原因」であると言ふことができる。しかし、同様に、「刺激条件」を「アフォーダンス」とみなすこともできるし、「知覚上の」を「現実の状態」や「儀礼的ダンスへの招待」に対立するものとしてみなすこともできる。要するに、「実験は因果関係の証拠となる」と言ふことには、レトリカルな利便性以上の意味はないのである。

[8] Feynabend (1976) の経験主義批判は、強力ではあるが、ある意味で、経験主義を擁護してしまっている。彼は、科学が「事実として」どのように進歩するかを信じる中で、ある一定範囲の客観的事実の存在を前提にしてしまっている。たとえ一定範囲であるにせよ、客観的事実の存在を前提にすることは、客観的観察による事実認定を批判する彼の立場とは矛盾する。

[9] 次章で見ると、この十年ほどの間に、方法論について多くの代案が提起された。フェミニズム的方法論、対話的方法論、反省的方法論、など。しかしながら、これらは既存の二項対立の内部に位置づけられるものではない。そうではなくて、これらは、人々と科学の両方についての観念を変化させ、伝統的な二項対立を廃棄することを自論むものである。

[10] 認知過程を（受動的ではなく）能動的なものとして、ないし、決定力のあるものとして見ることは——すなわち、認知過程に固有の傾向や要求があるとみなすことは——、認知主義運動の最も初期の頃からの特徴である。例えば、Miller, Galanter, and Pribram (1960) では、個人の行動は、活動の構造を階層的に秩序づけている内的プランによるものとされている。以来、鋳型をマッチングし、特徴を検出し、選択的に注意を向け、メンタルモデルを構成し、情報を処理する過程は、すべて、認知理論において中心的役割を果たしてきた。これらのプロセスはすべて、外界そのものによっては規定されないという意味において、基本

的なプロセスとみなされた。広く用いられている認知スキーマ概念は、その典型である。スキーマは、「プラン、概略、構造、フレームワーク、プログラムなどと同じ意味で使われてきた。これらすべてが前提しているのは、スキーマは、認知的で心的なプランであるということだ——それは、抽象的であり、行為の指針として、情報を解釈する構造として、問題解決のための組織化されたフレームワークとして役立つ」(Reber, 1985)。

第2章 社会構成主義の出現——「現実を描写すること」をめぐる

「知識は個人の頭の中にある」という観念が行き詰まりを見せる中で、心理学以外の学問領域では、すでにいくつもの知的変革が起こっている。これらの知的変革は、「頭の中の知識」という観念に対する代案、すなわち、「知識は社会関係の中にある」という代案を共通のテーマにしている。本章では、まず、このテーマをめぐる沸き起こりつつある議論を概括し、それらの議論が社会構成主義の人間科学に対してもつ含意を述べる。ポイントは、「言語は世界を忠実かつ客観的に描写することができる」という伝統的信念が崩壊しつつある、ということである。具体的には、イデオロギー批判、文芸論的・修辭学的批判、社会的批判に焦点を当てる。次に、これら諸批判から社会構成主義の中心的前提を導き出し、社会構成主義に基づく研究がいかなるものであるのか、その概要を述べる。後で述べるように、社会構成主義は、伝統的な学問的営みの放棄を迫るものではない——そうではなくて、伝統的営みを新たな枠組みの中に位置づけ、強調点を変えることを主張する。より重要なのは、社会構成主義が、新たな知的営みをもたらす点である——すなわち、社会構成主義によって、人間科学の射程と意義が大きく拡大する。

伝統的には、社会行動学の至上目的は、人間行動の客観的メカニズムを明らかにし、その性質を説明することであった。そしてその説明は、文化や時代の違いを超えて、すべての人間に妥当する説明でなければならなかった。したがって、社会行動学は、愛と憎悪、権力と服従、理性と情熱、病氣と健康、仕事とレジャーなどについて、それらを一般的な立場から説明するよう努めてきた。さらに、十分な説明がなされたならば、次には予測がなされる——例えば、子供はどのように成長

するのか、どうすれば偏見は低減されるのか、どうすれば学習が促進されるのか、親密さはどのように失われるのか、どうすればGNPは増大するのか、などなど。

ところで、自然科学の研究者と同様に、社会行動学の研究者も、これらの説明を、主に言語によって研究者仲間と伝え合い、また、社会に伝達する。研究者が研究成果を記述し描写する際に頼れるのは、言語をおいて他にない。つまり、客観的事実を運ぶもの——現在においても、未来に向けても——、それが言語なのである。このように、ある文化から他の文化へと、あるいは、現在から未来へと、真実を運ぶのが言語であるとすれば、(学問という)種の存続は言語の機能に依存していると言えよう。

今述べたことに、別段、目新しさを感じなかった読者も多いだろう。しかし、ここでちょっと立ち止まって、伝統的な言語観を再考してみよう。そもそも言語は、事実を「記述」し「描写」という重大な役割を担うるのであるか？ 言語が他者に対して真実を「運ぶ」媒体であると、確信してよいのだろうか？ われわれがどのように考えているとすれば、それはいかなる根拠に基づくのか？ ここで日常生活における「記述」を考え直してみよう。例えば、われわれは、ある人を「知的だ」「暖かい」「落ち込んでいる」などと記述することがあるが、その際、その人の身体は、絶え間なく変化している。すなわち、その人の行動は、詳細に見れば千変万化、常に変化し続けている。それに対して、われわれの記述は、静的で固定したものである。それでは、どのような意味で、言語がその人の行動を「記述」していると言えるのだろうか？ あるいは、次のようなことを考えてみよう。サラの表情や、テッドの声の調子や、アイルランド・カトリックとプロテスタントの関係について、それらを「敵対的」と言い表したとする。では、そのとき、「敵対的」という語は、正確には何を描写しているのだろうか？ 言うまでもなく、それぞれの出来事の外観は全く似ていない。それでは、「敵対的」という語は、いかなる意味で、共通のものを表現していると言えるのだろうか？

これと同様のワード(言葉)とワールド(現実世界)の乖離は、専門的なレベルでも存在する。例えば、精神分析では、分析者は、(クライアントの)移り変わる異常な行為群を、限られた語彙を用いて記述する、並外れた能力をもっている。ここでは、被分析者は、たどってきた人生の変遷にかかわらず、「抑圧的である」「葛藤状態にある」「防衛的である」などと診断される。あるいは、行動主義の実験では、実験者は、観察内容が徐々に変化するにもかかわらず、それらを、所定の